令和４年度　中央区立泰明小学校　　外部評価報告書

外部評価委員　：藤井　千恵子　　和地　泰志　　山本　佐江子
第三者評価委員：株本　光子

評価時期　　令和５年３月

１　重点目標の評価

重点目標１　「思いやりの心の育成」

「児童は互いに助け合いながら活動をしている」の質問に対し、児童、保護者、教職員のほぼ 90%が肯定的な回答をしている。児童は周りの友達と楽しくかかわっていることを自覚し、教師、保護者はそれを認めている。学校がこの姿を目指し、異学年交流、ボランティア活動などに取り組んだ結果と考える。

「児童は、場をわきまえたマナーやルールで登校していますか」の質問に肯定的な評価は、児童 95%に対し、保護者 68%、教職員 31%となった。次年度に向けて効果のある改善策を生み出すには、教師が分析し、改善策を出すだけではなく、児童会、保護者、生活指導の教職員等が本音で話し合うなど、それぞれが自己を見つめる場をつくることが必要ではないだろうか。まず、児童、教職員がそれぞれ自分は、どうかを振り返ることから取り組んでみるのもいいと思う。自分を客観的に見る力は、大きく成長する力につながる。

重点目標２「確かな学力の保障と学習意欲の喚起」

「よく考えて学習に取り組む」の質問に対し、児童 88%、保護者 78%、教職員 93%が肯定的な回答をしている。タブレット端末の活用、学習支援員のサポートなど様々な取組を行った結果である。また、地域と連携した学習活動には、保護者、教職員の 91%以上がその成果を認めている。地域連携の活動は、本校の強みであり、特色ある教育活動である。次年度、さらに発展させるために、銀座を舞台に活動する学習活動が、なぜよかったのか、何がよかったのかを明らかにし、本校児童のよさや魅力に磨きがかかる活動へと発展することを期待する。

重点目標３「児童の健康づくりの推進」

健康づくりを目指して、泰明タイムを学習活動に位置づけた。しかし、３年間コロナ禍で練習場所不足、指導者の不在などの問題で継続が難しかった。学校評価実施の中で、「目標をもって児童がなわとびに取り組んでいるか」の質問に、肯定的な評価は、保護者 30%、教職員 25%にとどまった。このままにしておけないと考えた学校では、継続可能な運動として３月に実施の「泰明マラソン」を、目当てをもって取り組む持久走をマイスクールスポーツとして位置づけ今年度中に、学校を上げて取り組むことにした。

学校評価を機に問題点を明確にし、目標を実現するために取組を見直し体制を整えた。泰明小の体制と底力である。一人一人が目標をもち、その実現を目指した「泰明マラソン」を、事後に児童がじっくりと振り返り、教師が計画を変更してまで取り組んだ成果を整理、確認していただきたい。

２　今後の改善に向けた意見

○　重点目標、評価項目、評価指標について

学校評価の目的は、学校が目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取り組みの適切さについて評価するとともに、次年度の教育活動の質を向上につなげるためである。

次年度も、教育活動の質の向上や教職員の働き方改革の視点から、重点目標とその取組を精選し、取り組んでいただきたい。

３　その他

「児童の問題や悩み、トラブルなどを相談しやすいか」の質問に保護者の 27.8%、「先生は悩みなどについて、話やすいか」の質問には児童の 38%が「そうではない・わからない」との回答をした。早急に、誰でもいつでも相談できる環境をつくっていただきたい。学校中の先生と話す、一緒に遊ぶなどの場を計画的に作るなどし、児童が、相談したい時に先生の姿や笑顔が思い浮かぶようにしておきたい。また、児童のわずかな変化も見逃さない教師の目を育てることも大切である。

令和4年度　中央区立泰明小学校　外部評価報告書

外部評価委員：藤井千惠子、和地泰志、山本佐江子　※敬称略
第三者評価委員：細谷　美明

評価時期　　令和５年３月

１　重点目標の評価

重点目標1（思いやりの心の育成）について

保護者アンケートのうち「自由記述欄」に多くの保護者の声を掲載したことを評価したい。厳しい意見は高学年に対するものと推察されるが、授業が成立しないという事態に対する学校の対応に失望の声もあり、これまでの対策では解決しないものと思われる。真面目に生活しようとする児童の救済を最優先に最低限のルールの遵守と、児童一人一人の主体的な活動の中から児童自身の自己評価と教師による児童理解をまずは徹底することを提案したい。

重点目標2（確かな学力の保障と学習意欲の喚起）について

児童、保護者の評価を見る限り、目標は達成しているように思える。ただ、目標１との関連で考え、授業のさらなる質の向上を目指すべきである。教員評価では「各教科等の授業の状況」において多項目と比べ「Ｃ」評価が多く、授業改善の意識があることが分かる。今年度２回の授業参観を行ったが、感じるのは児童の「個別最適な学び」の保障が十分ではないことだ。目標１でも記述したが、児童の主体的活動に対し自己評価と相互評価の導入といった「対話的学び」とそれら評価内容に対する教師の評価・助言といった形態の授業をより多く取り入れることが必要である。それは「深い学び」に発展し「もっと学びたい」という児童の学習意欲の喚起につながる。

重点目標3（児童の健康づくりの推進）について

３年目を迎えたコロナ禍の影響は本目標に対する児童、保護者、教員の各評価にも表れている。そこで本校が次年度対策として提案したのはマラソンである。全国体力・運動能力調査においていわゆる持久力の数値が低いことは運動する場所が少ない都心に住む児童の特徴でもある。縄跳びに代わる新たな運動への転換に期待したい。ただ、体力・健康は限られた運動によってすべて得られるものではない。スペースがなくとも頭部から足先まで鍛えることのできる運動も数多くある。また、親しみながら生涯にわたり行うスポーツの導入も大事な視点である。

２　今後の改善に向けた意見

児童、保護者の評価で目立つのが児童の悩みに対する学校のサポートが不十分であるというものである。それらは上記で述べた教職員の授業や生活における児童一人一人へのかかわりが薄いことに関係があるものと考える。上記で述べた提案以外にも、たとえば担任以外の教職員から気になる児童の情報を年に数回収集する機会を設け、学年あるいは学校全体で協議するなど、生活指導の全校体制づくりにとりかかるべきではないだろうか。「子どもたちには無限の可能性がある」と教員はよく口にするが、その可能性を発見することから教育といった営みは始まる。つまり子ども一人一人の理解が教育のスタートであり教育の基本である。そのことを最優先に考え、次年度からの教育活動に取り組んでもらいたい。

３　その他の意見

特になし。